鉄鋼建材 今年の課題と展望

13年度の鉄骨需要、1割増
5年ぶり500万トン超へ

鉄鋼建材業界は「公共工事悪論」のまん延に始まり、改正建築基準法の施行、リーマン・ショックなどマイナス影響の生じる〝事件〟が相次ぎ、長く暗いトンネルを抜け出せない状況にあった。しかし、東日本大震災を契機として国内における安全・安心への意識が変化。13年度は12年末の政権交代による景気の回復傾向に加え、震災復興の本格化、国土強靭化策の推進などが追い風となり、久々に「建材需要は堅調」という言葉が紙面に踊るようになった。13年を振り返りつつ14年の建材業界の課題と展望を探る。

（村上 倫）

13年度は建築・土木需要共に堅調な動きが続いた。建築分野では住宅着工床面積の見通しが8900万平方㍍と12年度比約6％増、非住宅が5400万平方㍍超で同5％増との見方が出ている。土木向けについても約10％の増加が見込まれ、建設関連の推定鋼材消費量は同150万㌧増の2200万㌧弱と震災後の1～2年で需要回復傾向は顕著になっている。

特に、13年度は首都圏や名古屋の再開発案件など1万平方㍍以上の大型物件が多く、上期は前年同期比76％増と大幅な伸びを示した。震災復興や国土強靭化策の推進に加え、東京オリンピック・パラリンピックの開催決定などで市中のムードも高まっており、五輪に関してはホテルの改装や増築など間接的な需要も見込まれる。

さらに、物流倉庫や商業施設、学校、病院、庁舎向けなど幅広い分野において需要は底堅く、地域的にも全国に波及しつつある。13年度の鉄骨需要は前年を1割以上上回る500～530万㌧程度と、08年度以来5年ぶりの500万㌧超えが見込まれる。四面ボックスなども足元はフル生産。再開発関連など超高層物件は14年度も引き続き堅調な需要が見込まれ、「今年の5～6月がピークとなるのでは」（高炉筋）との見方も出ている。

また、ロールコラムは13年度夏以降は2割以上の需要が伸びるなど堅調な需要動向。プレスコラムが需要増により納期が拡大したことも背景にあったもようで、下期には市中在庫もひっ迫の度合いを深めている。足元、四面ボックスがフル生産の状況にあるが「納期の関係で代替としてプレスコラム、その代替としてロールコラムという流れで需要が増加する可能性はある」（メーカー筋）という見通しも出ている。

好材料が多いが「消費税増税前の駆け込み需要に対する反動減は1つの懸念材料」（高炉筋）との指摘もある。特にプレハブなど戸建て住宅向けの軽量H形鋼は昨年9月までに前倒しで発注され前年比6割を超える伸びを示していたが、10月には逆に2～3割落ち込んだ。「既受注分だけで14年度上期まで埋まっており、鋼材発注という意味で直ちに影響はない」（同）が、今夏以降はマイナス影響が生じる可能性はあるという。通常のH形鋼については住宅向けの比重はそこまで大きくないが「学校や病院などの耐震化も駆け込みがあったといわれており、どこまで反動減の影響があるかは未知数」（同）という。

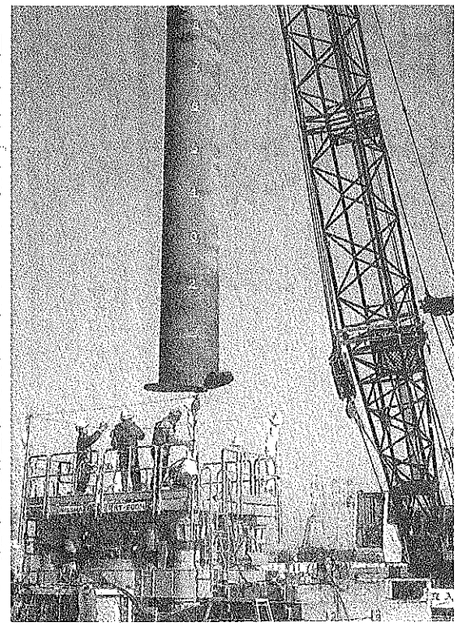
一方、土木用鋼材は、道路土木製品などは実需増加に至らないが、震災復興関連を中心に需要の増加傾向が続いている。震災直後から河川・港湾向けに鋼矢板の需要が出ているがまだ終了段階には至っていない。加えて沿岸部の土木工事の出件や海側から陸側へと需要の中心が移るなど、鋼矢板需要は14年にピークを迎えるともいわれている。また、仙台や塩釜、多賀城市、仙南地区など海岸に平行して運河が流れる地域では防潮堤の整備など海岸堤防需要も見込まれる。ほかに、LNGなど原発代替設備の基礎杭といった鋼管杭需要も引き続き堅調と見られる。

内需急増、フル生産続く

国内需要が伸び悩み、国内市況の立て直しを図ったことも影響し」て、高炉などは9月ごろまで輸出向けに生産をシフトしていた。しかし国内需要の増加と共に輸出量は減少。13年度は数万㌧級の大型プロジェクトが無く、1千～2千㌧程度の中小案件の集積となったことも特徴的だった。

海外プロジェクトとしてはエネルギー関連など14年度以降で期待できる案件もあり、外法一定H形鋼やハット形鋼矢板などの差別化商品の売り込みは継続していくものの、汎用品は「取引の継続性が必要で関係を維持するために受注する」（メーカー筋）レベルにとどまりそうだ。ただ、アジアを始めとするインフラ需要は、新興国の経済成長鈍化などの影響を受けつつも「インフラ整備の流れに大きな変化はなく基本的には今後もインフラ関連需要は出てくるものとみられる」（同）。問題は価格面で「アジアではH形鋼の供給過剰状態はしばらく続くと見られる」（同）。13年下期には中・韓による価格是正の動きも見られたが、今後の不透明感は強い。

一方、国内では五輪開催の波もあり、外環道など停滞していた案件が動き出すものと見られている。例えば外環道の整備が本格化するとセグメントなどの需要も出てくるが「一社ではなく、案件にかかわる全社で供給していかなければ追いつかない」（同）。需要の急増と資材や人材のひっ迫が顕在化する中で、短工期や省力化など鋼構造の優位性を発揮して、こうしたボトルネックの解消に寄与し、鉄需拡大につなげていくことが肝要となるだろう。さらに、需要が堅調な中で〝利益なき繁忙〟を避けるためにも、価格を立て直し利益を生み出せる構造へ変革・転換していくことが強く求められてくる。



鋼管杭の施工風景。リサイクル性にも優れる鉄鋼建材が活躍する

人材不足深刻に、対応急務

鋼構造の良さ生かせ

〝ボトルネック〟解消へ

ひっ迫する覆工板。メーカーフル生産は今年3月以降も続くという

建築・土木共に現在の流れが続くものと見られ、一部では14年度の方が上振れするのではとの見方もある。ただ、元々落ち込んでいた内需の、度もフル生産の状況が続くのは「期待の持てる水準が続くのではないか」との見方が支配的だ。内需向けは14年